

古代の上総北東部

—古墳時代後期からの集落と古墳の動向—

栗田 則久・木島 桂子

目 次

1. はじめに	165
2. 九十九里地域の大型古墳の地域的様相	165
(1) 前期から中期の様相	165
(2) 後期から終末期の様相	165
3. 古墳時代後期以降の集落の様相	176
4. 古墳と集落の展開からみた動向	182
5. 東北経営の拠点として	183

1. はじめに

近年、考古学の研究で海の道を利用した流通や集団の移動など、新しい視点での言及がなされてきている。千葉県は、三方を海に囲まれ、北は銚子から入り込んだ広大な香取海が広がっていた。このような環境の中でみると、東京湾沿岸・安房地域・太平洋岸・香取海周辺と大きく分けることができそうである。その中で、古墳時代後期以降、一大勢力を誇るようになった地域に太平洋岸、特に国造制下の武社国を中心とした上総北東部地域があげられる。横芝町殿塚・姫塚古墳に代表されるような後期から終末期の大型古墳、6世紀以降展開する大規模集落など、県内の他の地域とは異なった様相が看取される。本論では、従来から研究されてきた大型古墳の変遷を再確認するとともに、それを支えた集落遺跡の特徴を河川単位で検証し、集団による開発と大型古墳の関係をまとめ、その背景には中央政権による国家的意図が働いていた可能性が存在することを呈示してみたい。

2. 九十九里地域の大型古墳の地域的様相

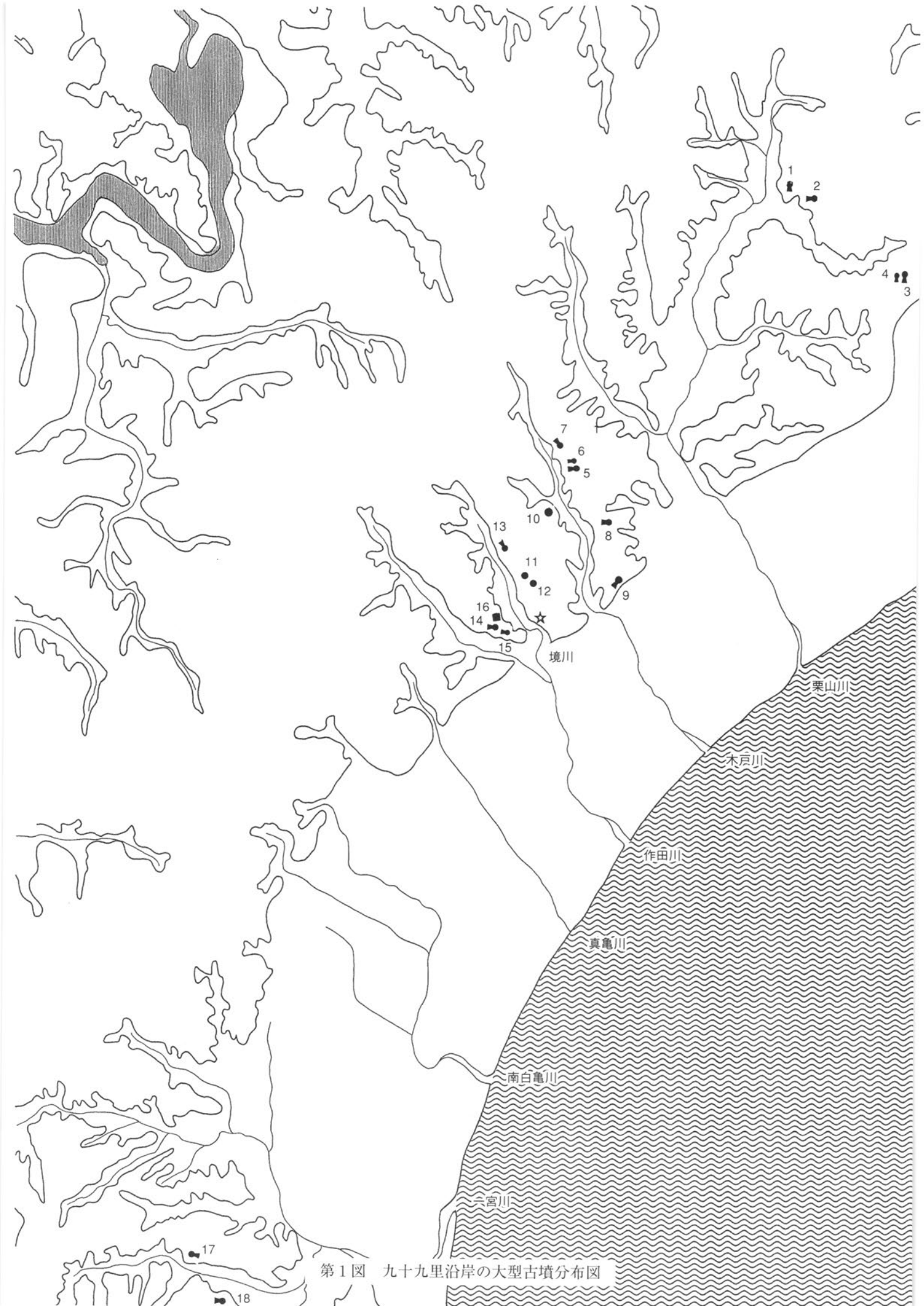
(1) 前期から中期の様相

九十九里地域の多くの古墳は、古墳時代後期以降に数多く築造されていることは周知のことであるが、前期から中期の古墳も若干ながら確認されている。流域ごとに北の方から見ていくと、まず栗山川中流域にあたる多古町柏熊8号墳（しゃくし塚古墳）があげられる。全長82mの前方後円墳で、後円部と前方部の比高差が4mほどあり、後円部に比して前方部が低く、先端の開きが少ない古式の古墳の様相を呈している。柏熊1号墳も大型の前方後円墳となる可能性もあるが、崩落のため、詳細は不明である。また、干潟町瀧台古墳も前期の大型前方後円墳として確認されている。全長約70mを測り、後円部墳頂の平坦面に木棺直葬と思われる陥没が確認されている。

九十九里南端の一宮川水系埴生川流域にも前期の大型前方後円墳である長南町能満寺古墳と油殿1号墳が築造される。能満寺古墳は、当初前方後円墳である可能性も指摘されてきたが、近年の調査により全長73mを測る前方後円墳であることが明らかとなった。周溝はなく、埋葬施設は「舟形木炭椁」と呼ばれるもので、銅鏡や玉類・鉄剣・銅鏃などを副葬している。4世紀後半の築造と考えられる。埴生川を挟んで立地する油殿1号墳は、全長93mと大規模で、大形の埴輪壺が検出されており、4世紀末から5世紀初頭の築造時期とされている。周溝は前方部前面にみられたのみで、台地先端を区画するようなものであったと思われる。なお、一宮川水系では、これらの古墳以降大型古墳が築造されることはなかったようである。

(2) 後期から終末期の様相

古墳時代後期の九十九里地域には、多くの大型古墳が築造されるようになる。特に国造制下の武社国の領地には顕著に認められる。時期的には、各流域に前代から継続する形ではなく、6世紀後半段階に突如として出現してくるような状況が伺える。一宮川流域では能満寺・油殿以降の首長墓と想定されるような大型の古墳は見られなくなる。ここでは、栗山川・木戸川・境川・作田川の各流域の首長墓の展開を見て



第1図 九十九里沿岸の大型古墳分布図

みよう。

第1表 山武郡を中心とした大型古墳一覧表

流域	番号	古墳名	墳形	全長	埋葬施設	副葬品	埴輪	周溝	備考
栗山川	1	稻熊8号墳	前方後円墳	82			有段口縁埴輪・円筒埴輪		前期後半、常陸鏡塚と類似
	2	北条塚古墳	前方後円墳	71			円筒埴輪・形象埴輪		6世紀中葉から後葉
	3	御前鬼塚古墳	前方後円墳	101			なし		終末期
	4	蕪木古墳	前方後円墳	60.8					前期
本戸川	5	殿塚古墳	前方後円墳	88	単室横穴式石室	金銅製耳環・硬玉勾玉・ガラス玉・霽玉・金銅製鈴・銅腕・頭椎太刀・直刀・刀子・鉄鏃・具	円筒埴輪・家形埴輪・形象埴輪	長方形二重周溝	6世紀後半、二段築成
	6	姫塚古墳	前方後円墳	58.5	複室横穴式石室	金銅製耳環・馬頭製勾玉・切子玉・ガラス玉・金銅製飾金具・金銅製雲珠・金銅張杏葉・轡・金銅製太刀・刀子・鉄鏃・釘・長頸壺・方頭太刀・琥珀玉・杯	円筒埴輪・形象埴輪	長方形(馬蹄形)二重周溝	6世紀後半
	7	小池大塚古墳	前方後円墳	72	単室両袖形横穴式石室	小玉・直刀・鉄鏃・釘・須恵器・土師器			
	8	蕪木1号墳	前方後円墳	76	横穴式石室		円筒埴輪・人物埴輪・馬形埴輪・形象埴輪	盾形二重周溝	朝日ノ岡古墳、6世紀後半
	9	大堤権現塚古墳	前方後円墳	115	複室横穴式石室	頭椎太刀・主頭太刀・金銅製刀子鞘片・切子玉・勾玉・ガラス玉・小玉・金銅製耳環	なし	盾形三重周溝	6世紀後半～7世紀初頭
	10	山室姫塚古墳	円墳	66	不明			あり	6世紀後半～7世紀初頭、テラス面あり、二段築成
境川	11	経僧塚古墳	円墳	45	単室横穴式石室 箱式石棺	直刀・刀子・馬具・霽玉・小玉・円形座金付金銅製大鈴・銀装主頭太刀・刀子・鉄鏃・耳環・馬具	人物・動物・家形・円筒3列	二重周溝	麻生新田4号墳、6世紀後半～末
	12	カブト塚古墳	円墳	43	単室横穴式石室	馬具類(杏葉・鞍用座金具・辻金具・具・飾り鉄)・直刀・鉄鏃・金銅耳環		二重周溝	麻生新田3号墳、6世紀末
	13	胡摩手台16号墳	前方後円墳	86	複室横穴式石室	直刀・しおで金具・具・釘・刀子・鉄鏃	なし	前方後円形二重周溝	7世紀初頭
作田川	14	西ノ台古墳	前方後円墳	90	不明	不明	円筒・人物・形象・家形・馬形	馬蹄形二重周溝	板付古墳群、6世紀後半
	15	不動塚古墳	前方後円墳	63	複室横穴式石室	ガラス小玉・霽玉・鉄鏃・鉄釘・人骨	なし	前方後円形周溝	板付古墳群、6世紀末～7世紀初頭
	16	駄ノ塚古墳	方墳	60	複室横穴式石室	耳環・霽玉・切子玉・硬玉玉・管玉・勾玉・丸玉・小玉・銀象眼頭椎太刀・直刀・鉄鏃・馬具(金銅製歩掛付飾り金具・銀貼杏葉・銀貼瓜形金具)・金銅製飾鉄・座金具・刀子・釘・土師器・須恵器	なし	二重周溝	7世紀第1四半期
一宮川	17	油殿1号墳	前方後円墳	93	不明		壺形	あり	油殿古墳群、4世紀末～5世紀初頭
	18	龍洞寺古墳	前方後円墳	73	舟形木炭塚	銅鏡・ガラス製丸玉・小玉・鉄刺・鉄刀・銅鏡・扁平板形鉄器・壺・ヤリガンナ・刀子・鎌	なし	周溝状遺構あり	4世紀後半

〔栗山川(椿海北岸～西岸)〕

栗山川流域では、古墳時代前期以降大型古墳の築造はみられず、後期になって全長71mの前方後円墳である多古町北条塚古墳が築造される。調査が行われていないため、詳細は不明であるが、測量図から、周溝が巡っているものと思われる。また、埋葬施設については、当該時期の太平洋岸の大型前方後円墳がくびれ部付近に南に開口する横穴式石室を有することが一般的であり、その点からみると、くびれ部南端から北に向かって一段低くなるコンタラインが観察されることから、この付近が埋葬施設の位置となる可能性も考えられる。築造時期については、採集された埴輪の形状や墳形が成東町西ノ台古墳に類似していることなどから、6世紀第3四半期を中心とした時期と推測される。そして、埴輪消滅後築造される大型前方後円墳が干潟町御前鬼塚古墳である。全長101mと後述する松尾町大堤権現塚古墳に次ぐ規模を誇る。測量調査のみで詳細は不明であるが、前方部が発達する墳丘形や埴輪が認められないことなどから、6世紀末から7世紀初頭の時期が推測される。この地域で注目される古墳に、八日市場市関向古墳がある。石室周辺のみで遺存であるため、墳形や周溝は不明であるが、造り付けの箱式石棺を有する横穴式石室から、多くの副葬品が検出された。金銅製双竜頭太刀・頭椎太刀・銅腕・金銅張杏葉・玉類など終末期の盟主墳にみられるような内容を示しており、全長5.7mに及ぶ石室に4m以上の墓道が付くなど、首長墓としての条件を備えている。おそらく、御前鬼塚古墳に後続する7世紀初頭の年代と考えられる。付近には八日市場大寺廃寺(竜尾寺跡)が存在し、後述する成東町駄ノ塚古墳と真行寺廃寺との関係に近く、真行寺廃寺近くに武射郡衙跡が位置することから、この周辺に下総国匝瑳郡衙が存在する可能性が高いと思われる。

〔木戸川〕

まず、木戸川流域では、下流域の埴輪を有する大型前方後円墳である松尾町蕪木1号墳(朝日ノ丘古墳)、やや上流の横芝町殿塚古墳が築造される。蕪木1号墳は後円部を東に向けた前方後円墳で、全長76mを測り、盾形の二重周溝が巡っている。埋葬施設の詳細は不明であるが、福間氏によると、この地域に普遍的

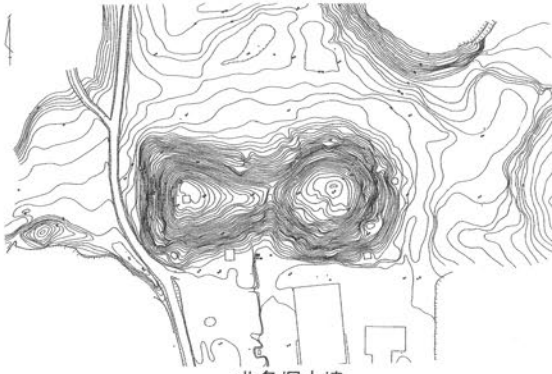
にみられる軟砂岩切石積みの単室の横穴式石室であろうと想定している。埴輪は、墳丘に上下二列で出土し、上段は円筒埴輪、人物埴輪、馬形埴輪が、下段は周溝に沿った基壇裾部を巡って、円筒埴輪と人物埴輪、形象埴輪（水鳥・鶏）がそれぞれ配置されている。

殿塚古墳は、中台古墳群中最大の前方後円墳で、東西方向に主軸を置き、墳丘長約88mを測る。二段築成となる可能性もある。周溝は長方形を呈すると思われる二重周溝が巡る。長方形を呈する周溝は千葉県内でもいくつか確認されている。殿塚古墳が初見で、その後下総町舟塚原古墳や千葉市人形塚古墳などで長方形周溝が調査されている。この中で、二重の長方形周溝となるものは、殿塚古墳と人形塚古墳である。県外では、埼玉県行田市埼玉古墳群に長方形周溝が集中している。主要古墳のほとんどが二重長方形周溝となっている。このタイプの二重周溝については、関東では、埼玉や千葉など限定された地域にみられること、埼玉の例の方が時期的に先行することなどから、千葉県の長方形周溝は埼玉県の影響が強かったのではないかと指摘されている。埋葬施設は、後円部墳丘南側に構築された砂岩切石積みの単室構造の横穴式石室で、旧表土面から2mほど上位の墳丘中段に位置する。副葬品は盗掘にあったようで、太刀などが残っているに過ぎないが、豊富な埴輪が検出されている。後円部墳頂部には、円筒埴輪列と家形埴輪2棟以上が、前方部墳頂には円筒埴輪列とさしば形埴輪がそれぞれ配置されていた。墳丘中段に形成された平坦面には、円筒埴輪や人物埴輪、形象埴輪が樹立され、内溝と外溝の中堤にも円筒埴輪列と人物埴輪が確認されている。

朝日ノ岡古墳や殿塚古墳からやや遅れて築造されるのが、横芝町姫塚古墳であろう。この古墳は殿塚古墳の北に隣接し、全長58.5mを測る。周溝は二重となることが確認されたが、平面外形が長方形を呈するのか馬蹄形であるのかは明確でない。後円部及び前方部とも墳頂には円筒埴輪が立てられ、人物埴輪や形象埴輪は北側の側面に確認された。埋葬施設は、前方部の墳丘南側、くびれ部近くに位置する複室構造の横穴式石室である。奥室と前室の主軸方向が5°ほど異なっている。副葬品は比較的豊富で、奥室には金銅製耳環、瑪瑙製勾玉を含む玉類、金銅製馬具などに須恵器の長頸壺が伴っている。前室には、方頭太刀を含む直刀13振、金銅製耳環、玉類などととも須恵器杯が出土している。石室東側の墳丘中に径1m弱の不整円形の平坦面が造り出され、約20点の土師器や須恵器の杯や高杯などが置かれていたようである。

中台古墳群の北側の小さな支谷を挟んで立地する舟塚古墳群中の最大の前方後円墳である芝山町小池大塚古墳は、東西に主軸を置く全長72mの規模を誇る。前方部が大きく開く平面形で、二段築成の可能性が指摘されている。周溝は一重の盾形を呈する。埋葬施設は墳丘南側くびれ部に設けられた単室の横穴式石室で、詳細は不明であるが、羨道部の幅と玄室の幅がそれほど差がないことから、複室的な様相も見られるとされている。姫塚古墳との前後関係は、出土遺物の詳細が不明のため、明確ではないが、本古墳には埴輪が伴っておらず、埴輪の消滅後の古墳と考えられ、姫塚古墳よりは新しい時期の築造と思われる。

木戸川下流の九十九里平野に接する台地上には、この流域で最も新しい時期の築造と考えられる松尾町大堤権現塚古墳が立地する。本古墳は前方部を南西方向に向けた前方後円墳で、全長115mを測り、この流域に限らず、武社国内では最も大規模な古墳となる。周溝は、三重に巡る盾形を呈し、周溝を含めると全長174mとなる。三重周溝は県内に例がなく、全国的に見ても大阪府堺市の大仙陵古墳や福岡県吉井町月ノ岡古墳、関東では群馬県藤岡市七輿山古墳、前橋市中二子古墳など数例を数えるに過ぎない。ただ、これらの古墳より本古墳の方が半世紀ほど新しい時期と考えられ、当該時期の例としては唯一のものであろう。埋葬施設は、後円部墳頂部からやや南東側に位置する複室構造の横穴式石室で、奥室の北側北壁に

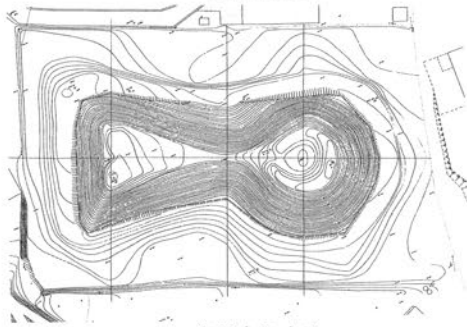


北条塚古墳

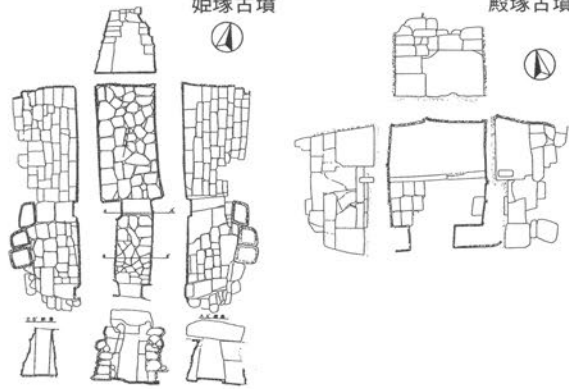


姫塚古墳

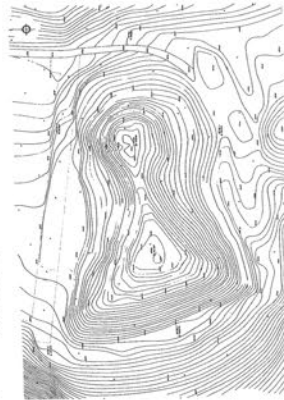
殿塚古墳



御前鬼塚古墳



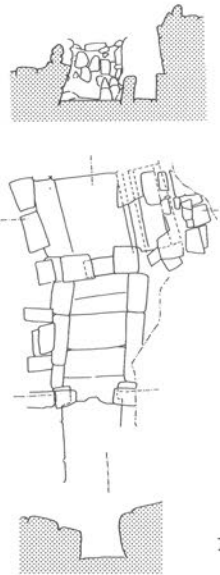
朝日ノ岡古墳



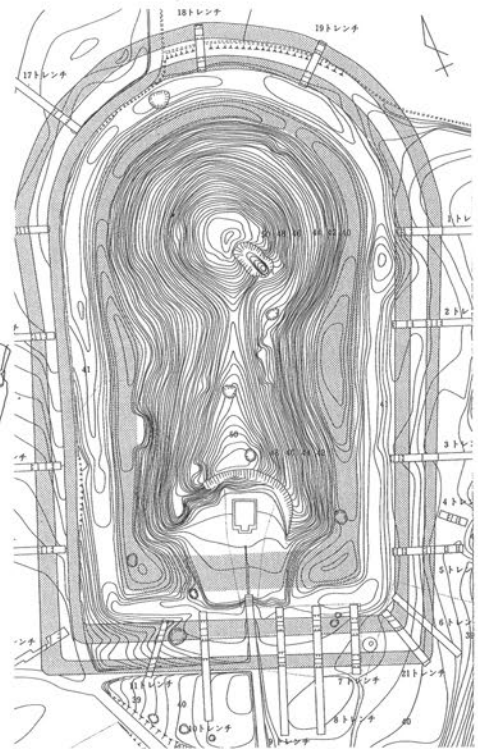
小池大塚古墳



山室姫塚古墳



大堤権現塚古墳



第2図 栗山川・木戸川流域大型古墳

接して石棺を設けている。1956年の日本大学考古学会の調査では、奥室の奥壁に朱が塗られていたことが確認されている。石棺内には、銀製の足金具や鞘尻などで飾られた頭椎太刀や圭頭太刀、金銅製刀子鞘、翡翠の勾玉を含む玉類などが副葬されていた。埴輪は確認されていない。

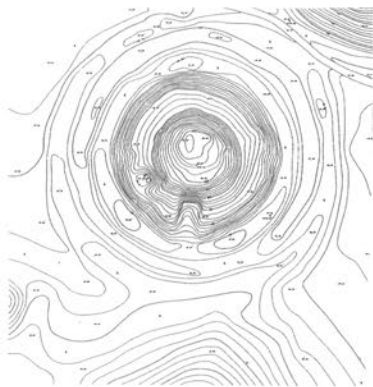
木戸川流域で特異な存在としてあげられるのが、中流域に位置する松尾町山室姫塚古墳である。本古墳は、測量調査が行われたのみで、詳細は不明であるが、終末期の大型円墳として従来から注目されてきた。また、古墳名も松尾姫塚古墳や大塚姫塚古墳などいくつか呼称されているが、千葉県の歴史資料編で、平山氏が所在地名を付して「山室姫塚古墳」として紹介している⁽¹⁾ので、ここでもその古墳名を使用することとする。本古墳は、墳丘径66m、高さ9.1mを測る県内最大級の円墳で、中段にテラス面を有する二段築成となる。周溝は全周し、外側に周提帯が巡っている。このようなタイプの終末期大型円墳は栃木県南部に分布していることが指摘されている。当該地域の前方後円墳終焉後の大型円墳は8基を数え、特に、壬生町壬生車塚古墳や岩橋町愛宕塚古墳は径82mを測る突出した規模を誇る。これらの古墳は、「基壇」と称される広い第一平坦面を有すること、その平坦面から南側に開口する切石積みの横穴式石室が構築されること、石室前にハの字状に開く広い前庭部が設けられることなどが共通の特徴としてあげられる。その築造年代については、調査が行われた愛宕塚古墳や径63mの大型円墳である壬生町桃花原古墳の出土遺物から6世紀末から7世紀初頭を中心とした年代が想定されている⁽²⁾。山室姫塚古墳の測量図をみると、墳頂部付近から南西方向にコンタラインが乱れている部分が認められる。この部分は、盗掘によるくぼみとされているが、おそらく、埋葬施設の盗掘が行われたもので、横穴式石室の位置を示しているであろう。また、石室前にはハの字状に開く広い前庭部が存在し、その面は墳丘中段に形成されたテラスと一致する。石室構造は不明であるが、古墳の特徴は栃木県の基壇持ち大型円墳と共通するものである。このような終末期大型円墳は、現在のところ千葉県内には例がなく、本古墳が下毛野地域の影響下で営まれたものと考えることができよう。

[境川]

境川流域では、殿塚古墳の時期に相当するような大型前方後円墳は確認されていないが、中流域に存在する麻生新田古墳群中で、埴輪を有する2基の大型円墳が調査されている。成東町経僧塚古墳は古墳群中最大の円墳で、径45m、高さ6.7mを測る。墳丘は二段築成で、周溝が二重に巡り、外側には外提が形成されている。埋葬施設は、南側裾部に横穴式石室、墳丘中段のテラス面に箱式石棺がそれぞれ確認されている。副葬品は、石室の方は盗掘を受けているため、直刀や馬具類を僅かに検出したに過ぎないが、石棺からは、円形座金付金銅製大鈴や銀装圭頭太刀など優品が出土している。本古墳からは多くの埴輪が確認され、人物埴輪・動物埴輪(馬・水鳥)・家形埴輪・円筒埴輪などが墳丘に3列樹立されていたようである。築造年代としては、埴輪などから6世紀後半頃が考えられよう。

山武町カブト塚古墳は、径43m、高さ5.4mを測る二段築成の円墳で、二重周溝となる。規模が若干小さくなるものの、経僧塚古墳と類似するものである。埋葬施設は、一段目のテラス面に設けられた横穴式石室で、南側に開口している。副葬品は、盗掘を受けているにもかかわらず、鍍金を施した馬具などが確認されている。築造年代については、決め手となるものが少ないが、馬具類の特徴や埴輪を有していないなどから、6世紀末から7世紀初頭頃に相当するものと思われる。埴輪の有無により、経僧塚古墳からカブト塚古墳への時期的変遷が伺える。

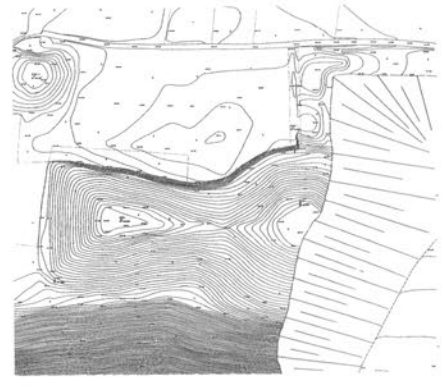
カブト塚古墳に後続する大型古墳として、境川中流域の麻生新田古墳群の北側に位置する胡摩手台16号



経僧塚古墳



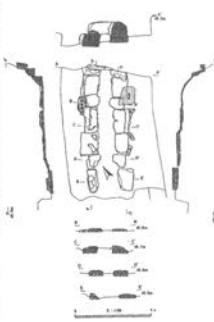
カブト塚古墳



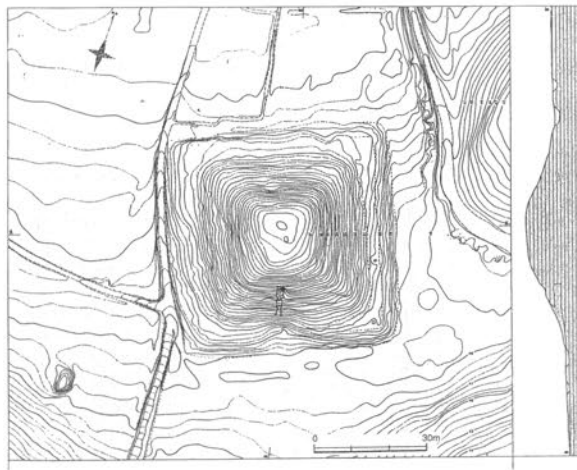
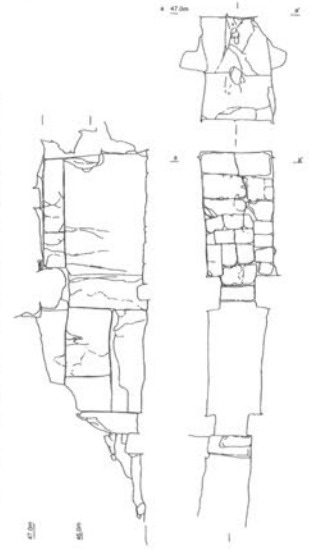
西ノ台古墳



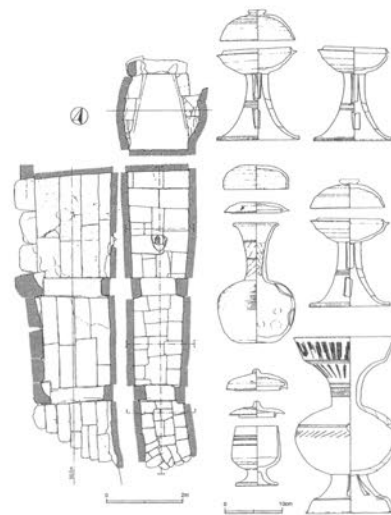
胡摩手台16号墳



不動塚古墳



駄ノ塚古墳



第3図 境川・作田川流域大型古墳

墳があげられる。本古墳は、全長86mを測り、前方後円形の周溝が二重に巡っている。埋葬施設は、軟質砂岩を用いた複室構造の横穴式石室で、内側周溝底から一段高くなった部分に開口している。副葬品はやはり盗掘を受けているようで、直刀や金銅製馬具、鉄鏃などが検出された程度である。この古墳の築造年代については、埴輪がないことや石室の構造などから、7世紀初頭頃とされている。おそらく、山武地域最終末の前方後円墳であろう。

このように、境川流域の首長墓の変遷は、唯一埴輪を有する経僧塚が最初に築かれ、埴輪祭祀終焉後にカプト塚古墳が大型円墳という地域の伝統的形態を継承して営まれたのであろう。その後、新たに前方後円墳という形、複室構造の横穴式石室を採用した首長墓である胡摩手台16号墳が築造されたものと思われる。

〔作田川〕

作田川流域の大型古墳は、中流域に位置する成東町板附古墳群に分布している。この中で、最も古い時期と考えられる古墳が西ノ台古墳である。前方部を西に向けた前方後円墳で、全長約90mを測る。墳丘は二乃至三段の築成が施されているようである。また、馬蹄形状を呈する周溝が二重に巡っている。埴輪は墳丘第一段のテラス面と周溝中提上に円筒埴輪列が配置され、他に家形埴輪が後円部に、馬形埴輪が前方部に、人物埴輪が後円部から前方部にかけての墳丘北斜面に置かれていたものと想定している。埋葬施設は確認されていない。築造年代については、杉山氏は埴輪の形態から殿塚古墳よりやや古い6世紀第3四半期と想定している⁽³⁾。

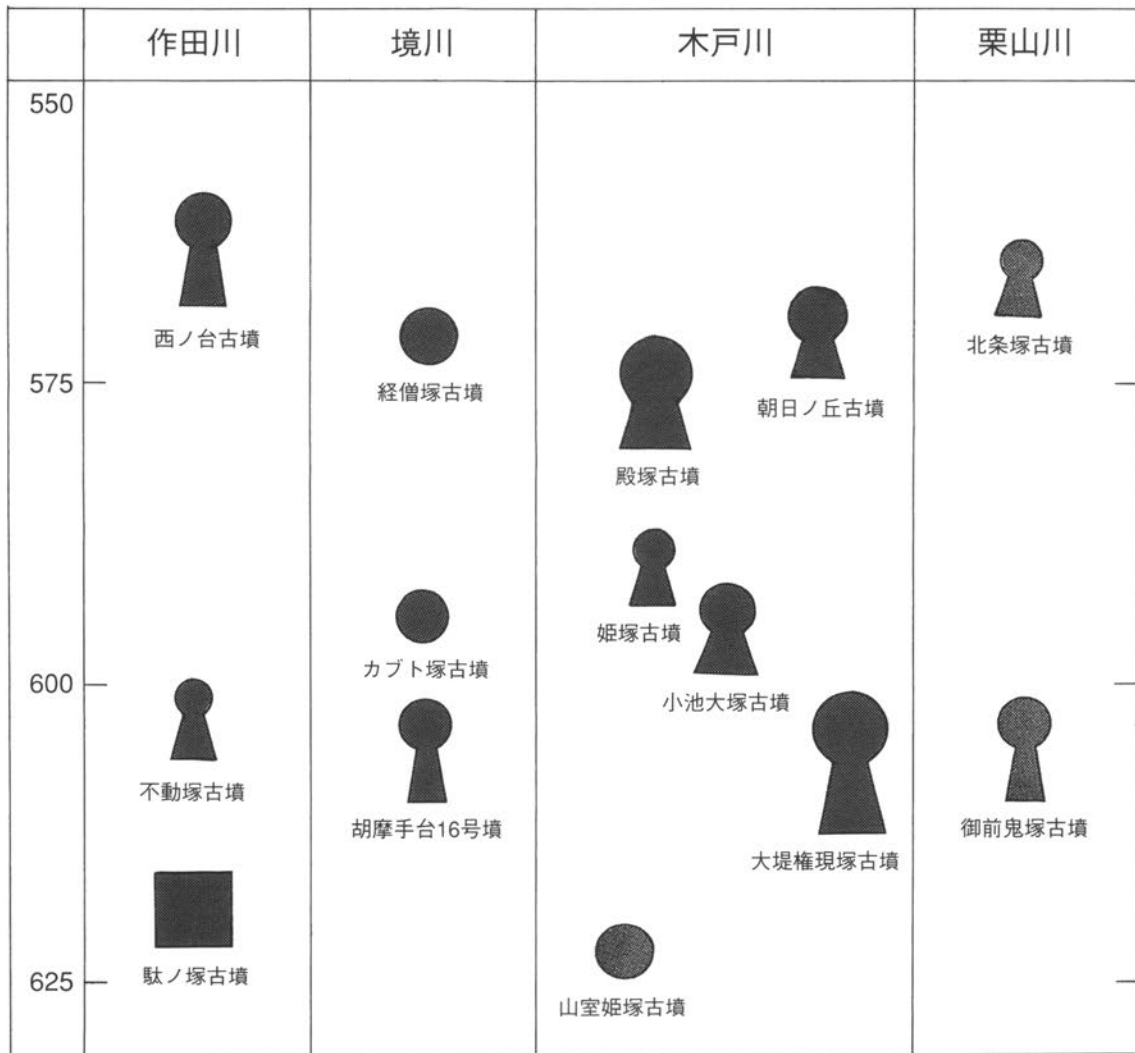
西ノ台古墳に近接して所在する前方後円墳として、主軸方向を西ノ台古墳と同様にする不動塚古墳が営まれている。全長63mを測り、前方後円形の周溝が巡り、外提が築かれている。埴輪は確認されていない。埋葬施設は、軟質砂岩の切石を使った複室構造の横穴式石室で、前方部のくびれ部に近い南斜面に位置し、南に開口する。副葬品は、すでに盗掘を受けていたためほとんど残っていないが、玉類や鉄鏃などが出土している。年代の決め手となるものは少ないが、埴輪を伴わないことや複室構造の横穴式石室の形態などから、6世紀末から7世紀初頭の築造と考えられる。

以上の大型前方後円墳に後続する古墳として、駄ノ塚古墳があげられる。2基の前方後円墳が作田川を望む台地縁辺に立地するのに対し、駄ノ塚古墳は作田川から延びる小支谷の谷頭部に占地している。1辺60mを測る三段築成の方墳で、高さ10mとなる。周溝は二重で、中提が築かれる。埋葬施設は、墳丘南面中央に位置する複室構造の横穴式石室で、石室前にはハの字状に開く前庭部が存在する。副葬品としては、玉類や銀象眼頭椎太刀、多量の鉄鏃、金銅製歩揺付飾金具などの馬具類など、盗掘を受けているにもかかわらず、豊富に遺存していた。また、前庭部からは、須恵器の有蓋高杯や長頸壺などが出土している。これらの須恵器は、TK209型式の中段階に並行する時期と考えられることから、築造年代は7世紀第1四半期と想定されている⁽⁴⁾。おそらく、不動塚古墳の次の代の首長墓として営まれたことは確実であり、この段階で、前方後円墳から方墳へと墳形を移行する何らかの背景が存在していたのであろう。

以上のように、山武地域に所在する首長墓系列の大型古墳は、埴輪を有するものから有しないもの、横穴式石室が単室から複室へと変化していく状況が共通して看取される。この中で、埴輪が確認された古墳は、木戸川中流域の殿塚・姫塚古墳、下流域の朝日ノ岡古墳、境川下流域の経僧塚古墳、作田川下流域の西ノ台古墳の5基である。この内、経僧塚古墳のみが大型円墳で、他は大型前方後円墳である。埴輪の様相から時期的に見て古いと考えられる古墳は、経僧塚古墳と西ノ台古墳である。この中では、経僧塚古墳

がやや先行する時期の所産と思われるが、それほどの時期差は存在しないであろう。実年代として、6世紀第3四半期頃と想定される。次の段階に位置するのは、殿塚古墳と朝日ノ岡古墳であろう。墳丘形態や埴輪の様相などからは、両者の時期的な差はほとんどないと思われ、ほぼ同じ時期に木戸川中流域と下流域に首長墓が築造されることになる。ただ、相違点として、殿塚古墳は長方形二重周溝、朝日ノ岡古墳は盾形二重周溝となる点があげられる。盾形周溝については、この地域の後期から終末期古墳に一般的に見られるものであるが、長方形周溝は埼玉古墳群に集中してみられる形態であり、その成立する背景には異なった状況があったものと考えられる。ただ、朝日ノ岡古墳に後続する大型古墳が認められないのに対し、殿塚古墳以後、姫塚古墳、小池大塚古墳が営まれており、このグループがこの流域の中心的な位置を占めるようになる。なお、殿塚古墳の実年代については、中央に間仕切りが施された複室構造への過渡期を示すような横穴式石室などから、西ノ台古墳よりやや新しい6世紀第3四半期後半頃と考えられる。埴輪を有する古墳として最も新しい時期となるのが姫塚古墳である。複室構造の横穴式石室が採用されており、埴輪を持たない大型古墳へと変換する時期の古墳と考えられ、6世紀第4四半期の時期が適当と思われる。

埴輪を持たない大型前方後円墳としては、栗山川支谷の奥部、椿海東岸に位置する干潟町御前鬼塚古墳、木戸川流域の小池大塚古墳・大堤権現塚古墳、境川流域の胡摩手台16号墳、作田川流域の不動塚古墳があ

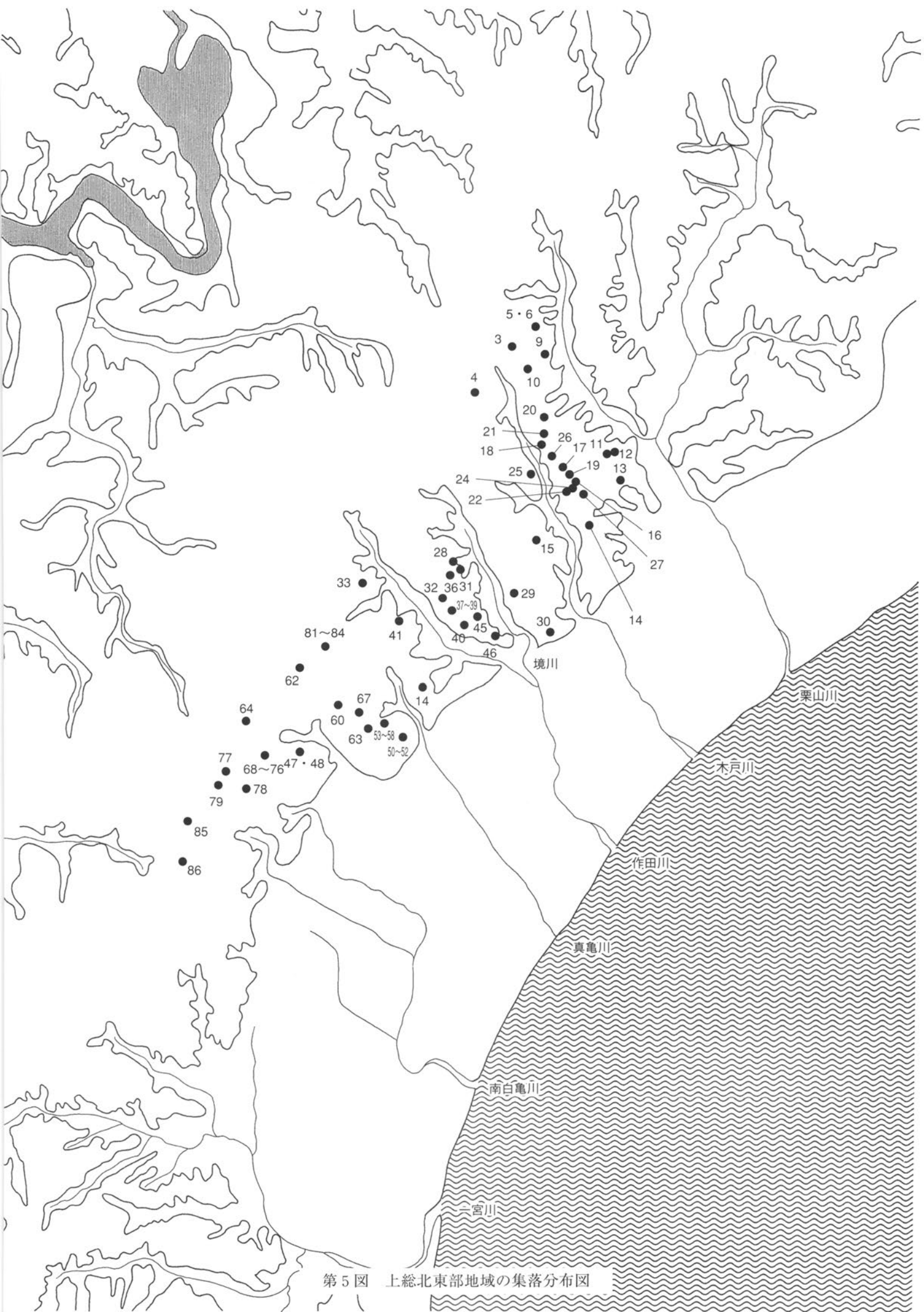


第4図 九十九里沿岸古墳時代後期以降大型古墳編年図

げられる。これらの古墳の多くは、二重周溝を呈し、軟質砂岩の切石を利用した複室構造の横穴式石室を採用している。これらの古墳の年代的前後関係は、供伴遺物などが不明なものが多く、決め手となるものは少ないが、石室の形態や墳丘などから考えてみる。これらの中で最も古いと思われる古墳は、小池大塚古墳であろう。姫塚古墳と主軸をほぼ同じくし、墳丘形態も類似すること、長方形の横穴式石室は複室化の様相を呈するものの、基本的には単室であり、終末期の大型前方後円墳が複室の横穴式石室であることを基本とすると、古い様相と考えることが適当であろう。また、最も新しい前方後円墳は胡摩手台16号墳になるとと思われる。萩原氏によると、横穴式石室の堀方が周溝底面からやや上位に開口していること、すなわち後出の方墳のありかたに近いものであることを新しい要素としている。年代としては、後述する駄ノ塚古墳の直前である7世紀第1四半期前半頃が想定されよう。武社の最終末の大型前方後円墳が境川に所在することは、後の郡衙のあり方を考える上で興味深いものである。小池大塚古墳と胡摩手台16号墳の間の時期に位置するのが大堤権現塚古墳と不動塚古墳である。複室の横穴式石室の規模や構造が駄ノ塚古墳と酷似するものの、石室構築面が墳丘南斜面にあることから、胡摩手台16号墳の直前の時期になるとと思われる。問題は、大堤権現塚古墳である。県内には例のない三重周溝と特異な横穴式石室で、武社の終末期大型前方後円墳の石室がくびれ部付近に位置するのに対し、本古墳のみ後円部墳頂部付近に設けられている。注目されるのは石室の構造で、横長の後室に縦長の前室が設けられ、奥室東側壁に沿って石棺が作りつけられている。このような構造は古墳の石室ではみられないが、横穴の作りつけ石棺と共通するものがある。墳丘や周溝の形態や石室の構造からでは他の終末期古墳との比較は困難であるが、西暦600年を前後する時期の古墳と考えられる。

このように見てくると、木戸川の大堤権現塚古墳、境川の胡摩手台16号墳、作田川の不動塚古墳というほぼ同じ時期の築造と考えられる3基の大型前方後円墳が流域最後の首長墓として浮かび上がってくる。ただ、埴輪を有する古墳を含めて考えると、最初に武社国の首長墓として作田川の西ノ台古墳が築かれるが、その後不動塚古墳まで大型古墳はみられず、主体は木戸川に移り、中流域の殿塚古墳、下流域の朝日ノ岡古墳が別のグループとして営まれるようになる。ところが、朝日ノ岡古墳以降下流域には大堤権現塚古墳が築かれるまでやや空白期間が存在する。一方で、中流域の殿塚古墳以降、姫塚古墳から小池大塚古墳へと連綿として大型古墳がみられており、おそらくこの段階では武社の中心が木戸川中流域にあったものと想定される。しかし、この中流域も小池大塚古墳以降大型前方後円墳は築かれず、中心は大堤権現塚古墳の位置する下流域に移っていったのであろう。なお、境川の経僧塚古墳・カブト塚古墳は大型とはいえ円墳であり、木戸川や作田川のような大きな勢力ではなかったと思われる。そこに最終段階に位置づけられる胡摩手台16号墳が営まれることが注目される。

終末期大型前方後円墳以後築造されるのが、大型方墳である成東町駄ノ塚古墳と大型円墳である松尾町山室姫塚古墳である。駄ノ塚古墳については、須恵器の年代から7世紀第1四半期とされているが、不動塚古墳や胡摩手台16号墳との前後関係から第1四半期でも後半になるものと思われる。一方、山室姫塚古墳については、測量調査が実施されたのみで詳細は不明であるが、同様の大型円墳の所在する栃木県内の基壇持ち大型円墳の時期はTK217以降とされ、駄ノ塚古墳以降の時期の築造である。山室姫塚古墳も同様の時期を当てることが妥当と思われる。栄町竜角寺岩屋古墳のように、畿内的な首長墓の系列は方墳とされていることからすると、大型円墳は別系統と考えられ、山室姫塚古墳の所在する木戸川流域は中心勢力とはなり得ず、胡摩手台16号墳や駄ノ塚古墳が位置する境川・作田川流域に纏まっていったことが伺わ



第5図 上総北東部地域の集落分布図

れる。後の初期寺院である真行寺廃寺や武射郡衙が境川下流域に建立されるのも、この付近が古墳時代以降の最終的な本拠地となったことを示しているのであろう。

3. 古墳時代後期以降の集落の様相

ここでは、九十九里沿岸地域の河川、栗山川・木戸川・作田川・境川・南亀川・南白亀川それぞれ6つの河川流域ごとの集落の成立時期と盛行する時期及び終息の時期を示して、流域ごとに違った様相があるのかどうか検討してみたい。

[栗山川]

栗山川流域では13遺跡を取り上げた。6世紀から集落が開始されるのは8遺跡で、全体の62%にあたる。この一帯で長く集落を形成する中心的な遺跡は、小原子遺跡群の谷窪・上楽遺跡である。小原子遺跡群は、芝山町の北東部に位置し、栗山川支流の高谷川上流と多古町を南流して栗山川に合流する、多古橋川により開析された樹枝状の台地上に立地している。庄作遺跡は6世紀から集落が開始され8世紀に33軒と急激にピークを迎え、9世紀まで20軒以上の竪穴住居が継続して営まれ10世紀で衰退する。谷窪・上楽遺跡は5世紀後半から集落が営まれ、6・7世紀に20軒以上の竪穴住居がみられ、8世紀には45軒とピークを迎える。その後9世紀まで安定的に展開するが、10世紀に終息する。

本流域は他の流域と比較すると、6世紀の段階から集落が開始される遺跡の割合が比較的高いと言える。この地域の拠点集落と思われる谷窪・上楽遺跡でも、5世紀後半頃から集落が形成され、比較的安定的に9世紀まで継続する。

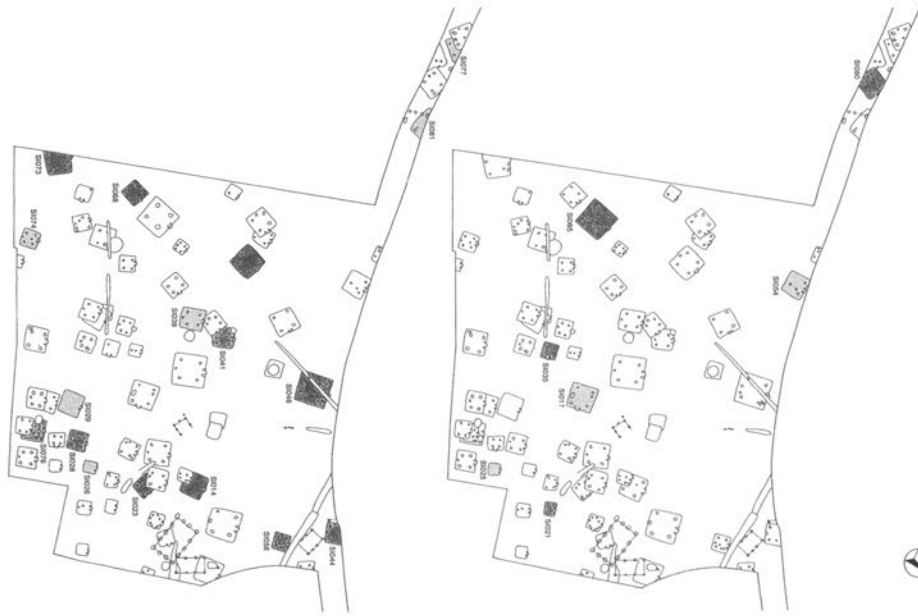
第2表 栗山川流域

		6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀
1	長倉宮脇遺跡	2	5	2	3	
2	蒲野遺跡			5	3	
3	深田台遺跡			1	2	
4	洞谷遺跡	1	3			
5	小原子遺跡群 遠野台・長津遺跡	9	10			
6	小原子遺跡群 庄作遺跡	7	9	33	24	3
7	小原子遺跡群 谷窪・上楽遺跡	20	22	45	20	2
8	御田台遺跡（並岡1010-1地点）	2	1			
9	下吹入遺跡群 東台遺跡	3				
10	大台西藤ヶ作遺跡			3	1	
11	北長山野遺跡			10	2	
12	東長山野遺跡			15		
13	荒久台遺跡	1	2	1		
	住居跡軒数合計	45	52	115	55	5
	各世紀住居跡軒数/全住居跡軒数	17%	19%	42%	20%	2%

※アミは遺跡のピーク時期、以下同様

[木戸川]

木戸川流域では14遺跡を取り上げた。6世紀から集落が開始されるのは12遺跡であり、全体の86%にあたる。この流域で中心となる遺跡は三田遺跡・御田台遺跡などがあげられる。三田遺跡は新東京国際空港の南東約5.5kmに位置し、木戸川に面した台地は未発達の小舌状台地が川に沿って並んでおり、三田遺跡



■ 第3期 (6世紀後半)
■ 第4期 (7世紀後半)

■ 第1期 (6世紀後半)
■ 第2期 (6世紀中葉)



■ 第7期 (8世紀後半)

■ 第5期 (7世紀中葉)
■ 第6期 (7世紀後半)

第6図 御田台遺跡集落変遷図

もこのような小舌状台地の一つに立地している。5世紀末から集落が開始され、6世紀までに65軒もの堅穴住居が建てられ、7世紀まで続くが、8世紀以降は急激に終息する。御田台遺跡は木戸川流域に面する小さな台地の奥部に位置し、第6図に示したように、三田遺跡とほぼ同様な変遷をたどる。6世紀初頭から集落が開始され、6世紀代で13軒、7世紀には28軒を数えるが、8世紀前半代までに台地上から姿を消すようになる。

この流域は各流域の中で、6世紀から集落が開始する遺跡の割合が一番高く、栗山川流域と類似している。ただ、栗山川流域が9世紀まで継続するのに対し、木戸川流域では7世紀段階まで大きな集落を形成するが、8世紀以降急激に終息を迎えるようになる。この状況は、この流域の古墳の展開と類似しており、注目される。

第3表 木戸川流域

		6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀
14	小向台遺跡		3	6		
15	名城遺跡	1	1	1	2	
16	小池新林遺跡	11	14	1		
17	小池地藏Ⅱ遺跡	6	3	3		
18	宮門遺跡	6	3	3		
19	小池木戸脇遺跡	7	12	2		
20	大台遺跡群 仲ノ台遺跡	31	33		2	
21	大台遺跡群 清水遺跡			7	2	
22	三田遺跡	65	35			6
23	久保谷遺跡	18	7			
24	御田台遺跡 (道路分)	11	14	1		
25	清水台No.1遺跡	1	14			
26	山武猪ノ堤遺跡	10	21	4		
27	御田台遺跡	13	28	11		
	住居跡軒数合計	180	188	39	6	6
	各世紀住居跡軒数/全住居跡軒数	43%	45%	10%	1%	1%

〔境川〕

作田川の支流となる境川流域では、発掘調査が少なく、不明な部分が多いが、報告された遺跡は小規模な集落ばかりである。2遺跡で6世紀の段階から集落が開始されている。また、三王台遺跡では8世紀代にピークがみられる。ただ、嶋戸東遺跡の確認調査では、古墳時代後期の堅穴住居跡が検出されており、武射郡衙以前の比較的大きな集落があったことが推測される。

第4表 境川流域

		6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀
28	三王台遺跡		1	16		1
29	真赤土遺跡	2	1	1		
30	比良台遺跡群 真赤土遺跡	4	1	1		
31	井之上遺跡		2	2		
	住居跡軒数合計	6	5	20	0	1
	各世紀住居跡軒数/全住居跡軒数	18%	16%	63%	0%	3%

〔作田川〕

この流域では16遺跡を取り上げた。6世紀から集落が開始されるのは12遺跡で全体の75%にあたる。この流域では荒迫遺跡群の野出山遺跡と栗焼棒遺跡が中心となる遺跡と思われる。野出山遺跡は6世紀から

始まり、8世紀を中心として36軒営まれ、9世紀に14軒そして10世紀まで続く。栗焼棒遺跡は作田川中流域の北岸の台地上に位置する。同一台地上の南端には、成東町駄ノ塚古墳や駄ノ塚西古墳が所在している。本遺跡は7世紀に45軒の竪穴住居が建てられピークを迎えておりそれ以降衰退していく。この栗焼棒遺跡周辺の遺跡は、6世紀後半から竪穴住居が建てられ急激に軒数が増加する傾向にあり、その後も掘立柱建物を含む集落が平安時代まで継続している。

作田川流域も6世紀段階から集落が開始し、7・8世紀にピークを迎え、9世紀以降には徐々に衰退していく傾向にある。この中では、7世紀代に限定されるような状況で大集落が形成される山武町栗焼棒遺跡が注目される。大形竪穴住居を中心とした集落構成が確認され、近接する成東町駄ノ塚古墳の築造時期とされる7世紀第1四半期に本集落が拡大することを考えると、駄ノ塚古墳を支えた集落とすることができよう。

第5表 作田川流域

		6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀
32	西椎崎台遺跡	6	9			
33	西椎崎台遺跡 (414地点)	2	1	1	1	
33	古宿遺跡		4	3		
34	古内遺跡	4	9	2	3	
35	妙見台遺跡	3	4	2	1	
36	駒形台遺跡		1	4		
37	荒追遺跡群 荒追遺跡		8	13	3	
38	荒追遺跡群 野出山遺跡	1	7	36	14	3
39	荒追遺跡群 入谷遺跡			15	1	
40	栗焼棒遺跡	5	45	7	2	
41	鷺山入遺跡	1	1	15	9	
42	大平台遺跡	6	2			
43	馬場A遺跡	2	4	22	6	1
44	新坂遺跡	7		10	3	
45	東風吹山遺跡	1		8	3	
46	道庭遺跡	5	1			
	住居跡軒数合計	43	96	138	46	4
	各世紀住居跡軒数/全住居跡軒数	13%	29%	43%	14%	1%

〔真亀川〕

真亀川流域では21遺跡を取り上げた。真亀川以北の流域とはやや異なり、6世紀から集落が形成される遺跡は7遺跡で、全体の33%と少なくなる。また、竪穴住居数も全体の3%程度である。この一帯での大集落は小野遺跡群の鉢ヶ谷遺跡である。鉢ヶ谷遺跡は、7世紀に55軒で集落が開始され、8世紀に113軒、9世紀に103軒と爆発的に大きくなる。そして10世紀に3軒となり終息してしまう。久我台遺跡・妙経遺跡・東金台遺跡群なども7世紀をピークとしている。久我台遺跡は東金市市街地の境からわずかに台地側に入り込んだ所にある舌状台地上に位置する。7世紀に77軒、8世紀に52軒、9世紀に45軒と継続し、10世紀も21軒の住居が建てられ、6世紀から比較的安定して集落が継続する遺跡である。

本流域では7世紀から8世紀にピークを迎える遺跡が多いのが特徴である。全体的には、6世紀後半以降に集落が形成され、7・8世紀代に最盛期を迎え、9世紀以降減少傾向となる。ただし、この中で、8世紀以降9世紀まで継続的に集落が営まれるのは鉢ヶ谷遺跡・羽戸遺跡・作畑遺跡と久我台遺跡・山田水呑遺跡である。前者の3遺跡は南にある南白亀川との中間地帯にあり、様相的には南白亀川流域の特徴と

類似する。また、後者の東金市久我台遺跡は当該地域の拠点集落、山田水呑遺跡は官衙的性格を有する遺跡であり、遺跡の性格上9世紀まで存続したことが考えられる。とすると、以外の本流域の遺跡は9世紀以降急激に終息する状況となる。集落の開始時期は作田川流域よりやや遅れるが、その終息段階はほぼ同様と思われる。

第6表 真亀川流域

		6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀
47	小野遺跡群 鉢ヶ谷遺跡		55	113	103	3
48	小野遺跡群 羽戸遺跡		31	24	23	2
49	作畑遺跡		36	60	16	3
50	東金台遺跡群 海老ヶ谷遺跡	2	35	31	5	
51	東金台遺跡群 妙経遺跡		1	29	8	1
52	東金台遺跡群 井戸向遺跡	5		1		
53	東金台遺跡群 東金黒田遺跡		21	2	3	
54	東金台遺跡群 椎木台遺跡		20	2		
55	東金台遺跡群 天王台遺跡	14	61	13	5	
56	東金台遺跡群 小油井台遺跡		45	5	3	
57	東金遺跡群 谷台遺跡	1	5	9	2	
58	東金遺跡群 丸山遺跡		60	24		
59	菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡 滝木裏Ⅱ遺跡			2	2	1
60	滝木浦遺跡			5		
61	谷台遺跡	2	11			
62	山田新田Ⅱ遺跡			2		
63	久我台遺跡	9	80	52	45	21
64	山田水呑遺跡			83	40	
65	稲荷谷Ⅱ遺跡		2	35	1	1
66	道庭遺跡	6	2	3	2	
67	妙経遺跡		46	19	11	
住居跡軒数合計		39	511	514	269	32
各世紀住居跡軒数/全住居跡軒数		3%	37%	38%	20%	2%

〔南白亀川〕

南白亀川流域では20遺跡を取り上げた。他流域と比べて6世紀から開始される遺跡は4遺跡しかなく全体の25%になってしまう。また特徴的なのはピークを8世紀に迎える遺跡の多いことで、全体の78%にあたる。大集落の多いことも特徴のひとつである。中心となる遺跡は、大網山田遺跡群一本松遺跡・猪ヶ崎遺跡、油井古塚原遺跡群滝東台遺跡などである。大網山田遺跡群が所在する台地は下総台地の南端部で上総丘陵との境付近にあたる。そこから北東に約4kmに油井古塚原遺跡群が位置している。一本松遺跡では8世紀には129軒、猪ヶ崎遺跡では124軒、東滝台遺跡では151軒と120軒を超える軒数の住居が営まれている。その後9世紀にも多くの竪穴住居がみられ、10世紀まで継続する集落もいくつか確認される。南麦台遺跡も規模は多少小さいものの同様の傾向を示している。この遺跡にみられるような傾向はこの地域に普遍的にみられ、集落内における掘立柱建物の割合や墨書土器の出土量の多い点が特徴である。

この中では、6世紀後半以降本格的な集落が確認される油井古塚原遺跡群は、当該時期の前方後円墳を含む群集墳が営まれた同一台地上にあり、古墳群を支えた遺跡群と思われ、この流域の他の遺跡にはない特徴である。これらの遺跡も群集墳消滅後は他の遺跡と同様の展開を示すようになる。この地域は、7世紀段階に集落が形成されるが、8世紀から9世紀に大集落が営まれ、多くの掘立柱建物が含まれる。千葉県内の8世紀以降の集落でこれほど多くの掘立柱建物が建てられる地域はなく、きわめて畿内の景観に近



第7図 南麦台遺跡B・C地区集落変遷図

いものがある。笹生氏が、このような開発の背景には、上総国司藤原黒麻呂らによる藻原庄の成立などのような権力者による初期荘園開発が行われた結果であろうとしており⁽⁵⁾、まさに藻原庄北側に位置する南白亀川流域は畿内的な様相を持った入植集団による大規模開拓が広く行われた地域であろう。

このように流域ごとに集落の消長をみていくと、北に位置する栗山川・木戸川・作田川・境川の特徴は6世紀の早い段階から集落が営み始められ、9世紀段階には急激に終息傾向となる。ただ、その傾向も北に行くほど顕著になる。作田川流域では9世紀段階にもある程度集落が継続している。それに比べ南に位置する南白亀川では、6世紀の集落はきわめて小規模で、しかも古墳群周辺に限定されている。集落のピークは8世紀から9世紀にあり、10世紀代まで継続する。真亀川は北側の流域と南白亀川流域の中間的様相を呈している。この流域ごとの様相は大型古墳の築造と併せて考えると興味深いものがある。

第7表 南白亀川流域

		6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀
68	大網山田遺跡群 金谷野遺跡 (2地点)		7	15	4	
69	大網山田遺跡群 道門坊遺跡 (5地点)		11	13	14	7
70	大網山田遺跡群 一本松遺跡 (6地点)		17	129	66	62
71	大網山田遺跡群 升形遺跡 (8地点)		6	51	17	
72	大網山田遺跡群 新林ⅠⅡⅢ・北前野遺跡	8	13	55	20	
73	大網山田遺跡群 猪ヶ崎遺跡		28	62	54	
74	大網山田遺跡群 南前野遺跡		33	98	36	
75	大網山田遺跡群 小西平遺跡		21	33	20	
76	大網山田遺跡群 宮山遺跡		6	51	17	
77	金谷郷遺跡群 山荒久遺跡		33	41	19	
78	台前遺跡	2	2	14	4	
79	上引切遺跡		1	1	1	1
80	一本松遺跡		16	15	14	1
81	油井古塚原遺跡群 滝東台遺跡	40	29	151	95	11
82	油井古塚原遺跡群 油井古塚原遺跡	24	28	35	14	
83	油井古塚原遺跡群 外荒遺跡	2	1	12	5	1
84	油井古塚原遺跡群 作畑遺跡			10	1	
85	南麦台遺跡		23	50	47	4
86	砂田中台遺跡			26	74	2
	住居跡軒数合計	76	275	853	522	89
	各世紀住居跡軒数/全住居跡軒数	4%	15%	47%	29%	5%

4. 古墳と集落の展開からみた動向

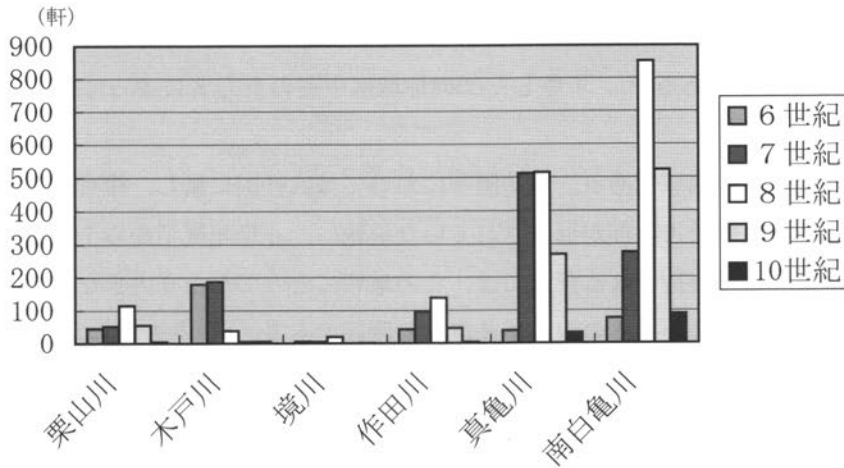
集落の様相を概観すると、流域ごとに時期的な特徴があることが確認される。まず、栗山川流域では、6世紀から集落が形成される傾向があり、8世紀をピークとして9世紀台まで比較的安定的に集落が継続している。ところが、南側に位置する木戸川流域では、やや様相が異なり、6世紀代と7世紀代の集落がほとんどで、調査された竪穴住居数の約9割が7世紀代までで、8世紀以降はきわめて小規模な集落が散在するにすぎない。その南に位置する境川・作田川流域は若干様相が異なり、6世紀から集落が形成されるものの、規模は小さく、本格的な集落の形成は7世紀以降となる。この流域の中心的集落である栗焼棒遺跡は、竪穴住居のほとんどが7世紀代であり、以外の遺跡は8世紀に主体を置いている。一方、そのさらに南に位置する真亀川及び南白亀川流域をみると、作田川以北の集落とはやや異なり、6世紀代に集落が形成される遺跡はほとんど認められない。真亀川流域は7世紀代から集落が形成され、9世紀代まで継続している。その様相は、南白亀川流域でさらに顕著になり、8世紀段階にピークが認められ、9世紀代も比較的大規模な集落となっている。10世紀代も前時期より極端に少なくなるものの、他の流域と比較すると、台地上の集落の消滅時期がやや遅くなっているようである。

このようにみると、作田川以北と真亀川以南で大きく分けられるようである。作田川以北では、6世紀代から集落がみられるのに対し、真亀川以南では6世紀代の集落がほとんど認められない。また、作田川流域でも、木戸川は、8世紀以降の集落は少なく、南の作田川流域ではむしろ8世紀以降の集落が多くなる。また、真亀川以南でも真亀川より南白亀川の方が全体に新しい時期の集落が多い。

このような集落の流域ごとの時期的変遷は、各流域に所在する古墳時代後期以降の主要な古墳の動向と比較すると興味深いものがある。まず、6世紀代の集落が少なく、8世紀代以降に主体を置く真亀川以南

第8表 水系別竪穴住居軒数変遷

水系	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	合計
栗山川	45	52	115	55	5	272
木戸川	180	188	39	6	6	419
境川	6	5	20	0	1	32
作田川	43	96	138	46	4	327
真亀川	39	511	514	269	32	1365
南白亀川	76	275	853	522	89	1815
合計	389	1127	1679	898	137	4230



では、古墳時代後期以降の大型古墳は営まれておらず、群集墳もほとんど認められない。大網山田台遺跡群に代表されるように、それまで大きな勢力がなかった地域に大規模な開発能力を有する集団が入植し、8世紀以降に多くの掘立柱建物を伴うきわめて中央的色彩の強い大規模集落が展開するようになる。その背景に、初期荘園開発のような畿内勢力の関与が伺われるとするならば、当然、前代までの遺産である古墳の築造は必要ないものである。

一方、作田川以北では、前述したように6世紀後半以降大型前方後円墳や大型方墳が築造されている。特に、6世紀代になって大規模な集落が展開する木戸川流域では、朝日ノ岡古墳や殿塚・姫塚古墳など大型前方後円墳が連綿と築造され、大型円墳である山室姫塚古墳を最後に大型古墳は姿を消すようになる。5世紀代にはほとんど集落が認められなかった地域に、6世紀代になって新たな開発とともに大規模な集落が展開し、それを背景に大形前方後円墳が築かれるのである。この開発には、在地の集団ではなく、外来の入植者集団の存在を考えなければならないであろう。これについては後章で述べることとする。

木戸川以外の境川や作田川でも6～7世紀の集落が展開しているが、木戸川と異なる点は、8世紀段階に集落のピークがある点である。作田川流域には終末期の大形方墳である駄ノ塚古墳が築かれ、境川流域には武射郡衙や郡寺である真行寺廃寺が建立されるなど、最終的に武社国及び後の武射郡における中心地となったことを示している。集落の主体が最終的に作田川や境川に集約されることと関連している。

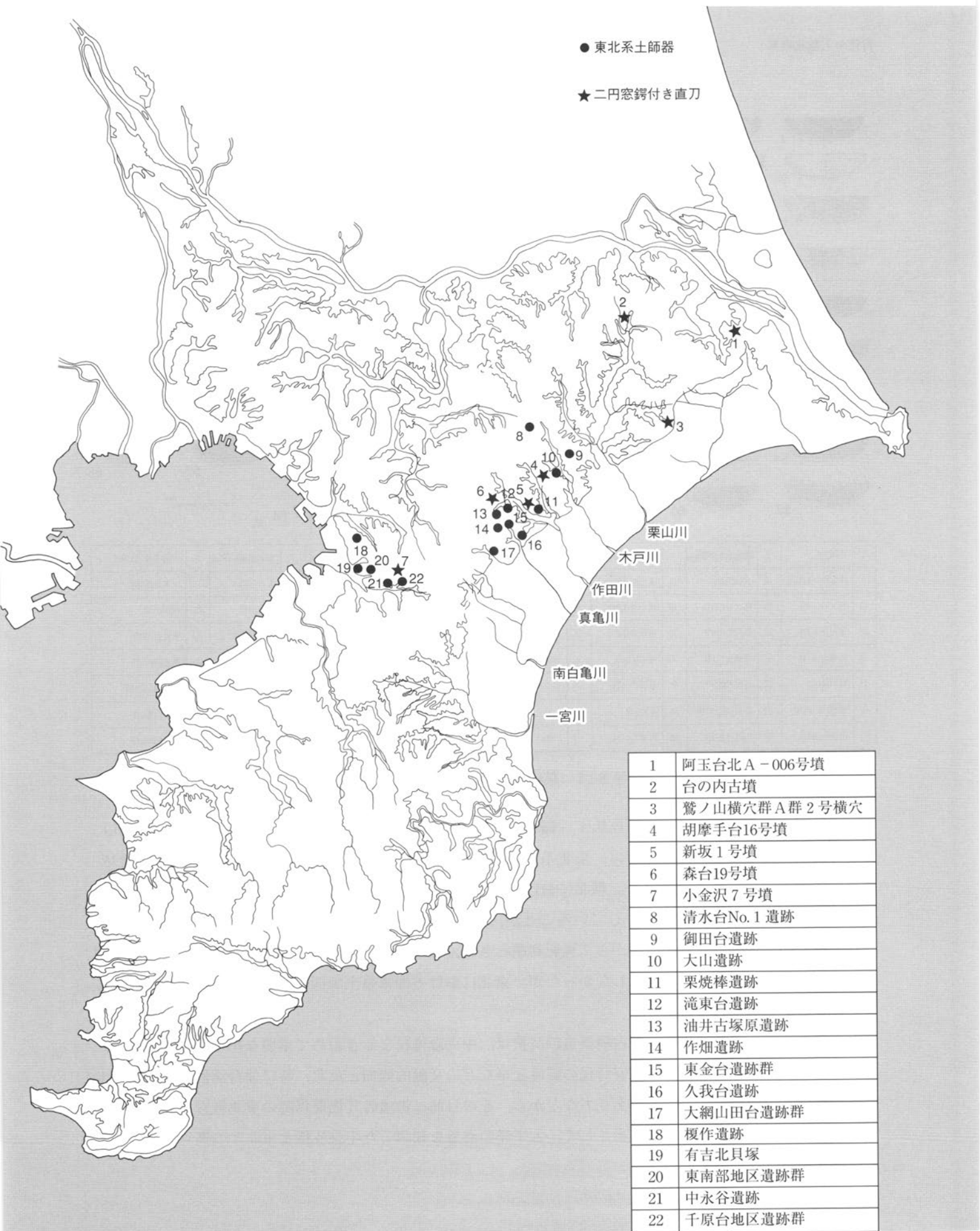
5. 東北経営の拠点として

上総北東部地域の主に古墳時代後期以降の首長墓と集落の動向を検討してきたが、流域ごとにみると、

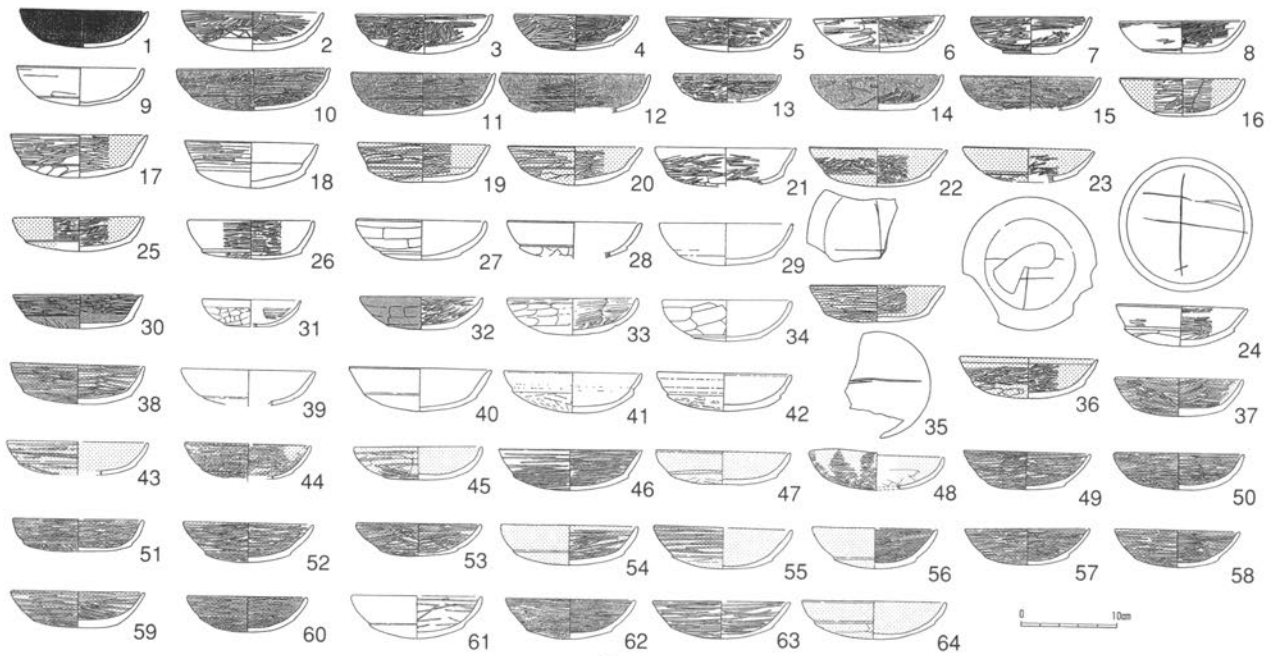
大きく、①古墳時代前期からの集落や古墳が展開する栗山川流域と一宮川流域、②奈良時代以降に大規模な開発が行われる真亀川・南白亀川、③古墳時代後期以降の集落とともに多くの大型古墳が分布する木戸川・境川・作田川の3タイプに分けることができる。①については、栗山川流域の柏熊1・2号墳・瀧台古墳、一宮川流域の能満寺古墳・油殿1号墳以後に大型古墳が築造されなくなる地域であり、一過性の現象として捉えることができる。また、②の地域は古墳時代はほとんど未開の地であり、奈良時代以降大規模な開発とともに大集落が広く分布している。集落内の掘立柱建物の占める割合が県内の他地域と比べてみても圧倒的に多くなる。畿内の・中央の先進文化を有した集団が広く開発をしていったことが伺え、笹生氏が指摘しているように、上総国司藤原黒麻呂が770年代に成立させた藻原庄のような荘園開発が他地域でも行われていた可能性がある⁽⁶⁾。まさしく②の地域は中央の有力者によって広く開発されたものと想定されよう。

ここで注目されるのが③の地域である。国造制下においては武社国に属し、律令制下では上総国武射郡に含まれる。それまで小規模な古墳群が形成されていた地域に、6世紀後半から7世紀初頭までの極めて短期間に大型古墳が集中して築造される背景には、この地域にとってかなり大きな社会的変革があったことが想像される。その重要な鍵を握るのが、伊甚屯倉の設置である。『日本書紀』安閑天皇元(534)年条の伊甚国造に関する伝承のなかに、「安閑天皇の皇后として迎えた春日山田皇女のために、天皇の命で伊甚国の真珠を求めたが、期限を過ぎて進上しなかったために、国造の伊甚直稚子が重い罪を負わされ、罪を免れるために伊甚屯倉を献上したいと申し出て、伊甚屯倉が定められた。」というような内容が記されている。川尻氏は、この伝承についてはある程度史実を反映したものであろうとしている⁽⁷⁾。とすれば、6世紀中葉には伊甚屯倉が存在していたこととなる。また、『日本三代実録』貞観九(867)年四月条には「上総国伊□郡春部直黒主売」とあり、この史料から、春日部は、安閑天皇の皇后の春日山田の名にちなんでつけられた名代の民であり、春日部直は、在地の春日部を統括した伊甚国造、朝廷に奉仕する現地の伴造と考えられるとしている。伊甚国が、伊甚屯倉設置の6世紀半ば頃に中央の強い管理下にあったことが想定される。この春日部に関して注目される史料がある。『続日本紀』神護景雲三(769)年三月辛巳条に「牡鹿郡に住む春日部奥麻呂等三人を武射臣とする」という大国造道嶋宿禰嶋足の申請に基づく在地有力者の一括賜姓記事がある。この点については、平川氏により詳細に検討され、海の道を介した武射地域と牡鹿郡との関係、さらに、武社国造である牟邪臣を支族とする和爾氏と春日部との関係から、武社地域の大型古墳も春日部氏が大きく関与していたことが想定され、興味深い状況であるとしている⁽⁸⁾。この指摘は非常に重要であり、6世紀後半以降に突如として営まれる武社の大型古墳は、春日部氏の影響、ひいては中央政権の思惑の中で成立した可能性が高い。そして、その目的は東北経営そのものであったと考えられる。そこで、考古学的な側面から古墳時代後期の東北とのつながりを示すものをあげてみよう。

まず、房総出土の東北系土師器杯をみてみよう。小林氏⁽⁹⁾や岸本氏⁽¹⁰⁾などにより、限定された地域に分布していることが指摘され、木島氏により年代的位置づけがなされた。この土師器杯の特徴は、丸底で口縁部が内湾しながら高く立ち上がり、体部下方に稜が形成されるため底部は小さくなる。器面調整は丁寧なミガキが施され、多くは内外面黒色処理が認められる。このようなタイプの土師器杯を出土する遺跡の分布範囲は、第8図にあるように武社国を中心とした地域と千葉市南部から市原市北部の村田川流域に集中する傾向が伺われる。時期的には、6世紀後半から7世紀中葉頃までがほとんどである。この分布と類似する傾向を示すものに、鏢の棟側に2つの円形の小孔が開けられた直刀を出土する古墳があげられる。



第8図 東北系土師器・直刀分布図

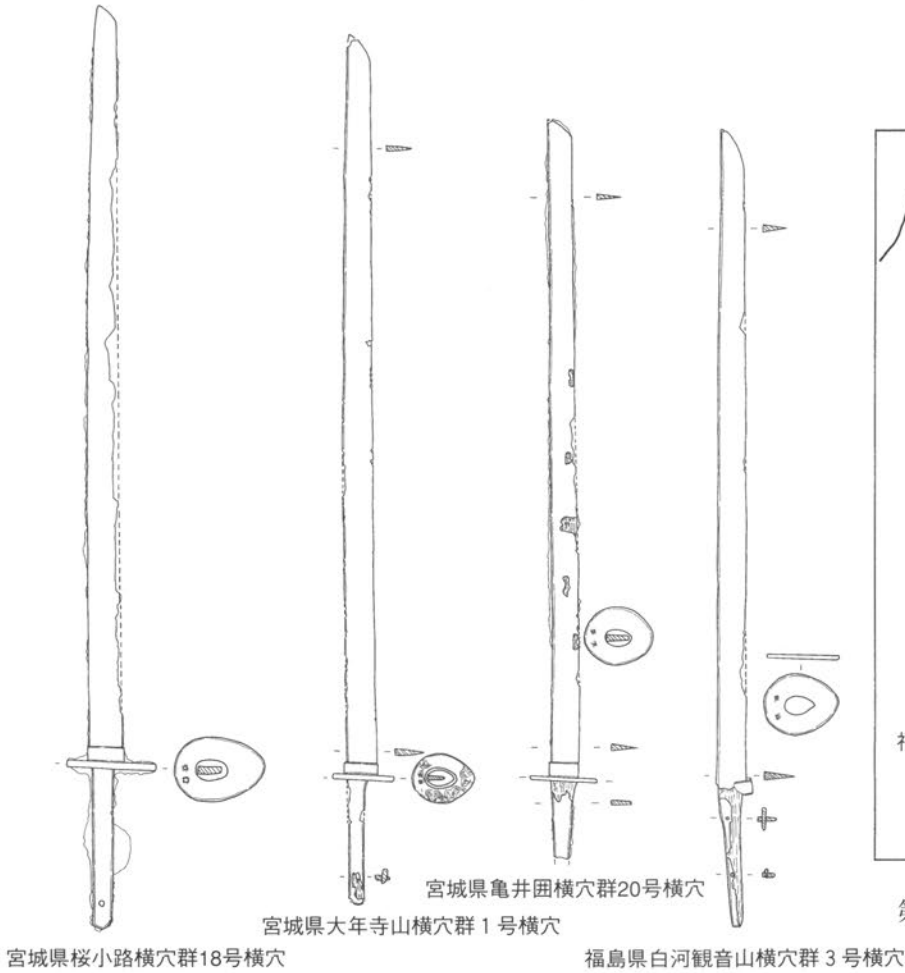
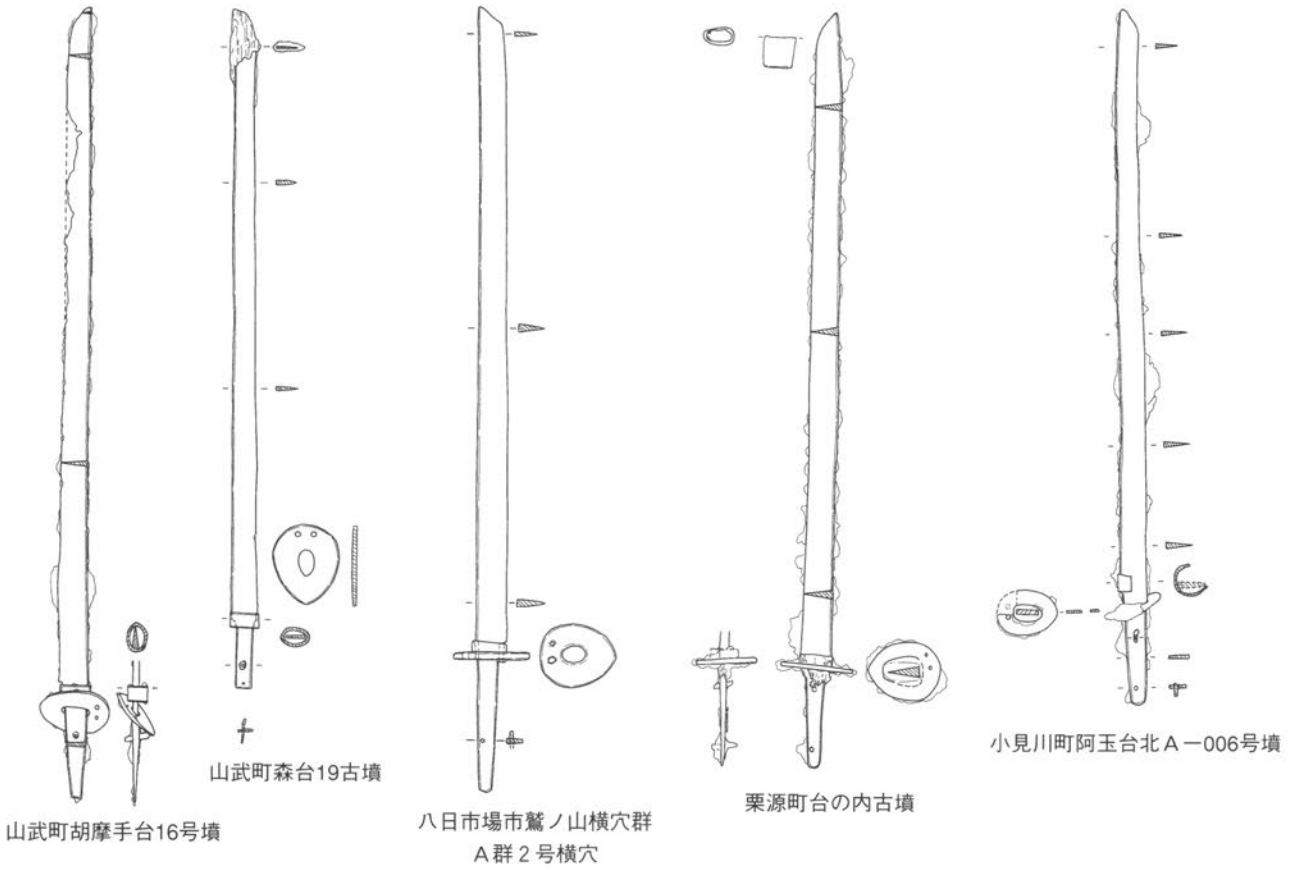


1	作畑2住	2	椎木台VIE003	3	椎木台VIE003	4	椎木台VIE053	5	東金黒田VE007	6	東金黒田VE007	7	東金黒田VE019	8	小油井台IXD001
9	小油井台IXB019	10	大山SI-017	11	大山SI-017	12	大山SI-017	13	大山SI-037	14	大山SI-068	15	大山SI-069	16	一本松H-054
17	猪ヶ谷024住	18	猪ヶ谷024住	19	猪ヶ谷024住	20	猪ヶ谷028住	21	宮山H-28	22	宮山H-62	23	宮山H-62	24	宮山H-62
25	道円坊017住	26	道円坊019住	27	南前野H-135	28	南前野H-135	29	清水No1-8住	30	油井古塚原H-012	31	油井古塚原1住	32	東滝台049住
33	東滝台061住	34	東滝台121住	35	宮山H-069	36	御田台029住	37	有吉二次191住	38	有吉二次195住	39	椎名崎075住	40	椎名崎076住
41	宮山H-062	42	御田台029住	43	春日作017住	44	春日作017住	45	伯父名台048住	46	伯父名台067住	47	草刈C区A号墳	48	草刈C区5号墳
49	草刈E区049住	50	草刈E区157住	51	草刈E区157住	52	川焼台036住	53	川焼台036住	54	川焼台128住	55	川焼台128住	56	川焼台394住
57	川焼台394住	58	川焼台394住	59	川焼台415住	60	川焼台433住	61	川焼台433住	62	川焼台611住	63	城ノ台058住	64	城ノ台283住

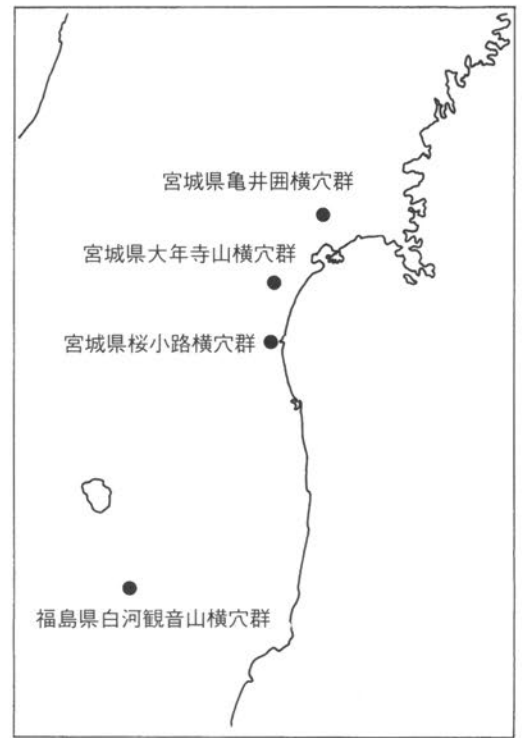
第9図 県内出土東北系土師器実測図

このタイプの直刀については、折原氏が「偏在斜軸配置二円窓（孔）」及び「偏在中軸配置二円窓（孔）」として分類したもので、その分布は、東北系土師器杯の分布と同様、武社国の領域内、及び村田川流域、そして下海上国内に散在している。東北におけるこのタイプの直刀は、中通りの白河観音山横穴群以外は、仙台湾沿岸、旧陸奥国南部に集中していることが、菊池氏によって提示されている⁽¹¹⁾。その直刀が副葬された横穴の年代は、6世紀後半から7世紀初頭とされ、このタイプの直刀を副葬する房総の古墳の時期と一致してくる。ちなみに、図示しなかったが、東北における関東系土師器の分布も同様の地域に広がっていることが指摘されている⁽¹²⁾。

以上のように、武社国内の大型古墳築造の契機は、中央政権によるきわめて重要な拠点として意図された結果であり、伊弉屯倉設置や平安時代の賜姓記事などの文献的側面と東北、特に仙台湾沿岸と房総の太平洋岸地域との関係を示す遺物のあり方などから、その目的は古墳時代後期以降の東北経営を睨んだものと考えることが妥当と思われる。まさしく、太平洋の海道を利用した中央政権と東北との拠点地域として武社国が選定されたのであろう。



第10図 二円窓鑿付き直刀実測図



第11図 東北地方二円窓鑿付き直刀出土横穴分布図

第9表 東北系土師器の出土遺跡と時期

No		6世紀			7世紀			8世紀			合計	備考
		前	中	後	前	中	後	前	中	後		
1	東金市久我台遺跡			3	8						11	
2	栗焼棒遺跡			10							10	
3	千原台ニュータウン IV中永谷遺跡			2	4						6	
4	東南部ニュータウン20 有吉北貝塚2 (古墳時代以降)			4	3						7	
5	千葉市榎作遺跡			3	1						4	
6	作畑遺跡			1							1	
7	東金台遺跡群 椎木台遺跡			1	1		1				3	
8	東金黒田遺跡					2	1				3	
9	小油井台遺跡			1		1					2	
10	大山遺跡			5				1			6	
11	大網山田台遺跡群 一本松遺跡				1						1	
12	猪ヶ崎遺跡				4						4	
13	宮山遺跡				3	3					6	
14	道円坊遺跡			1	1						2	
15	南前野遺跡				1	1					2	
16	清水台No1遺跡			1							1	
17	油井古塚原遺跡					2					2	
18	滝東台遺跡			1		1	1				3	
19	御田台遺跡				2						2	
20	東南部ニュータウン 5有吉二次遺跡					2					2	
21	東南部ニュータウン 6椎名崎遺跡					1	1				2	
22	東南部ニュータウン 27春日作遺跡					2					2	
23	東南部ニュータウン 伯父名台遺跡			1	1						2	
27	東南部ニュータウン 城ノ台遺跡					1	1				2	
24	千原台ニュータウン 草刈遺跡C区					1	1				2	
25	千原台ニュータウン 草刈遺跡E区					3					3	
26	千原台ニュータウン 川焼台遺跡			2	5	4					11	
	合計	0	0	36	35	24	6	1	0	0	102	

註

- (1) 平山誠一 2003「山室姫塚古墳『千葉県の歴史 資料編 考古2 (弥生・古墳時代)』 千葉県
- (2) 秋元陽光・大橋泰夫 1988「栃木県南部の古墳時代後期の首長墓の動向-思川・田川水系を中心として-」『栃木県考古学会誌』第9集 栃木県考古学会
- (3) 杉山晋作ほか 1991『成東町西ノ台古墳確認調査報告書』 千葉県教育委員会
- (4) 白石太一郎・杉山晋作 1996『千葉県成東町駄ノ塚古墳発掘調査報告』国立歴史民俗博物館研究報告第65集 国立歴史民俗博物館
- (5) 笹生 衛ほか 1993『歴史時代(1)』房総考古学ライブラリー7 財団法人千葉県文化財センター (6) 同上
- (7) 川尻秋生 2001「屯倉制と房総の屯倉」『千葉県の歴史 通史編 古代2』 千葉県
- (8) 平川 南 1992「海道・牡鹿地方」『石巻の歴史 第六巻 特別史編』 石巻市
- (9) 小林清隆 1993「村田川流域の6~7世紀の土師器の再検討-千葉市榎作遺跡の分析を中心に-」『千葉県文化財センター研究紀要14』 財団法人千葉県文化財センター
- (10) 岸本雅人 1998「出土土器について」『千葉東南部ニュータウン20-千葉市有吉北貝塚2 (古墳時代以降) -』 財団法人千葉県文化財センター
- (11) 菊池芳朗 1993「東北地方における横穴の出現年代」『福島県立博物館紀要』第7号 福島県立博物館
- (12) 村田晃一 2000「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺-移民の時代-」『宮城考古学』第2号 宮城県考古学会